

サンクトペテルブルグにあるロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所 写本フォンド・コレクション所蔵の二冊の帳簿

ワジム・クリモフ

はじめに

サンクトペテルブルグの東洋古籍文献研究所写本部に保存されている二冊の帳簿は重要な歴史資料である。商品取引は、いかなる形態であれ（物々交換の形式、物品を金銭に替える形式、金銭を物品に替える形式）、取引の正確な記録や几帳面な会計行為なしには不可能である。すでに奈良時代には、三十の行政法・民法典で構成される大宝令で、その第二法「公式文書の形式」第六六条「文書の書式」に「公的な関係において書類は常に楷書で書くこと。計算簿（原語は「ボチヨウ」。簿帳のこと）で（中略）数字は大字の漢字で書くこと」と定められている。日本ではすでに八世紀の初めに、立法レベルで会計の原則が定められており、その後の各時期に更なる発展をみせた。整備された会計計算、帳簿の記載行為は、数字が高い発達段階にあったこと、計算と会計を処理し得る高い技能を持った十分な数の役人が存在していたことを裏付けている。

意外なことであるが、東洋古籍文献研究所の写本部門に、最も古い帳簿が保管されており、そこには、日本の商人と一九世紀初めにサハリン島南部に住んでいたアイヌとの取引が記録されている。日本人研究者である谷本晃久は「蝦夷地全体を見渡した場合でも、一九世紀初頭の対アイヌ

ヌ交易の帳簿は現在知られておらず、従ってこの時期における対アイヌ交易の実態を知ることができる一次史料として稀有の記録とみなすことができる」と指摘している。²⁾ どのようにしてこれらの帳簿が東洋古籍文献研究所東洋写本部門の日本の写本・木版本コレクションに入ったのかについて見ていきたいと思う。

1 東洋学研究所時代の日本コレクション

— O・P・ペトロヴァとV・N・ゴレグリヤドの目録 —

二冊の運命は、ロシアの、さらに、アジア博物館、東洋学研究所、東洋学研究所レニングラード支部、そして、最後に、ロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所の日本学形成の歴史と直接結びついている。一八一八年サンクトペテルブルグ（一九一四年）ペテログラード、一九二四年）レニングラード（に改名）に設立されたアジア博物館は一九三〇年科学アカデミー東洋学研究所になった。一九一七年一〇月革命の後、後に東洋古籍文献研究所になることになるアジア博物館は、徐々に東洋諸国の歴史、文化、宗教、東洋のテキストクリティーク研究の伝統を失い、ますます現代の事象を扱い始めた。それにも拘わらず、学派の古くから伝統が研究者に影響を与え続けた。このため、最終的にソ連邦政府は一九五〇年、研究所をレニングラードからモスクワに移す決定

をすることになった。研究所の研究活動は東洋諸国におけるソ連邦の政策と相關するべきはずであった。研究所長職には既にタジキスタン共産党中央委員会第一書記であった【一九四四・四六第二書記、四六・五六第一書記】ボボジャン・ガフーロヴィチ・ガフーロフ（一九〇八・一九七七）が任命された【一九五六・一九七七】。レニングラードには東洋学研究所の支部が作られ、そこに手書文書一次史料の研究と東洋諸国の現代に至るまでの歴史研究が託された。支部には、写本フォンドの写本と木版本の学術的反転を導入する課題が課された【狭義においては、学門界に自分たちの活動を広く紹介して知識を共有することで、「研究の資源化」にやや近いものがあるが、一方、その業務や任務を公表することにより、業績、評価、昇給、昇進、予算の獲得、さらには、組織の存続そのものをも目的とする行為】。学術職員たちの力で、五〇種以上のカタログが作成され出版された。³⁾日本の写本と木版本コレクションの目録作成作業はヴラジスラフ・ニカノロヴィチ・ゴレグリヤド（一九三二・二〇〇二）の注釈によると一九五八年に始まった。しかし、フォンドの主要部分の調査・解説目録作成の後、喪失したと思われる、あるいは、以前には記録されなかった、日本の写本と木版本のいくつかは、収蔵物の別の未だ分類されていないフォンド部分に存在していることが発見された。⁴⁾

日本コレクションの写本、木版本は、主として、二人の学術職員、オリガ・ペトロローヴァ・ペトロローヴァ（一九〇〇・一九九三）とヴラジスラフ・ニカノロヴィチ・ゴレグリヤドが作成した。この二名はロシアでの日本学的发展と次世代の日本学者の育成に多大な貢献をした。二人の複数の「目録・解題」作成を助けたのは、ガリーナ・ドミートリエヴナ・イワノワ（一九二七・一九九九）とズイノヴィイ・ヤコヴレヴィチ・ハニン（一九二七・？）である。一九七一年、V・N・ゴレ

リヤドにより作成された日本の写本・木版本目録・解題の第五巻が出版された。⁵⁾ゴレグリヤドは、帳簿の、初めての、しかしながら、十分に内容のある目録・解題作成を作った。とりわけゴレグリヤドは、「大いに興味のあるものは貸借帳（*on. № 105, on. № 106*）」で、これは一九世紀初めの、一方で日本商人と高利貸の間の、他方で、日本人商人と北海道アイヌの間の、経済・交易関係の性格に関して記載するものである。これらの史料の優れている点は、正確に日付が付けられ、それぞれの書き付けが、特定の個人に関するものであり、名前と居住地名とが付いているということが「できる」と書いている。⁶⁾V・N・ゴレグリヤドは、この一〇五、一〇六と番号を付けられた貸借帳「大福帳」と「簾貸帳」に対し、それぞれ簡単な解説をしている。⁷⁾もれなく完全にここに引用する。

「一〇五」⁸⁾

A・四七 (Cl. XVIII № 76)

大福帳 (だいふくちょう Daifukuchō)¹¹⁾

収支帳

言語は日本語

交易品（たばこ、酒、糸、針、種々の魚等）の買入れ、売り渡し、貸与に関し日々記載された本。買入手【取引相手】の姓【名】。当時まだ姓はない、居住地、交易品名とその数量、【決算】残金【差引高】を記す。おそらくは、北海道のアイヌ民族の間で帳付けされたものと思われる。買入手は二四ヶ所（シラスシ、チシヤ、コンプイ、ホロナイホ、ヤワンベツ、シラトコ、他）の一八三人（ソログル、アオニゲ、イトワンカ、カンシユルガ、イコシユンケ、オレワングル、アベトナシグル、他）。

帳面裏表紙の外側には帳付け場所の名前が次のように書かれる。

久生石円番屋（「蛮族キュウセイイシマルの家」(?) の意味か）

写本一八〇五年（文化乙式丑三月）⁽¹²⁾

「M・S・プロッセ・コレクション」サンクトペテルブルグ一八六一年一二・五×三二一ノート一冊六二一葉【ママ】白紙部分も多い。

丁付けなし。紙は日本紙。ソーショ【草書か】、変体仮名、カタカナ（名、名称）、仮綴本。⁽¹³⁾

しかし残念ながら、これらの記述にはいくつかの不正確さがある。それは完全に釈明できる。というのは、ゴレグリヤドは、極めて短期間で、保存単位で一七個の目録・解題作成をせざるを得なかったのだ。それが第五巻として一九七一年に世に出たものである。そして帳簿は日本文化の重要な文献であるとは理解されていない。それゆえ、明らかに、日本人とアイヌ間の交易契約研究に十分な注意が払われていない。

とりわけ一〇五番と番号を付された史料（帳簿「大福帳」）の解題において、次のような点が不正確であった。第一に、【帳簿への】記載は定期的になされたが、毎日ではなく、取引が行われた場合であった。第二に、「買い入れ、売り渡し」とは言えない。というのは、金銭＝商品＝金銭という古典的なかたちでの買い入れというのはなかったからである。V・N・ゴレグリヤドも正しく指摘しているように、日本商人は、つけのかたちで（あえて付け加えれば、常につけのかたちで）、煙草、酒、中古の日本物品（小鍋、漆器、衣服など）を、一方アイヌ人は、魚、鯨肉、その他、日本人が興味を持つ手作り品でつけを清算していた。言い換えれば、このような取引は、後払いのかたちでのバター貿易と見なすことができる。第三に、ここで言うアイヌは北海道アイヌではなくサハリン・アイヌのことである。V・N・ゴレグリヤドも地名

と指摘しているシラスシ、ヤワンベツなどは、北海道ではなくサハリン島南部のものである。本論文の筆者である私がサハリン島の地名（トヨハラ、シラスシ、クシユンコタンなど）を最初に耳にしたのは、先輩同僚のガリーナ・ドミートリエヴァ・イワーノヴァとの会話においてであった。従って、V・N・ゴレグリヤドがこれらの地名を知らなかったとは想像しにくい。それに、信頼に値する地名辞典であればどれを見てもこのことは簡単に確認できるわけであるから、なおさらである。これは、V・N・ゴレグリヤドの父親が銃殺刑に処せられており、ゴレグリヤド本人も「人民の敵の息子」の一人とされていたことを念頭に置くならば、「やむをえない過ち」であつたらうと推定することができる。「おそらく「帳簿は」北海道で帳付けされたものであると思われる」（傍線はクリモフ）と【日本人研究者ではなく】ロシアの研究者であるゴレグリヤドが記したのは、上記のことが理由だったのではなかったのかと思われる。ただし、時間が足りなかったのかもしれないという要因を完全に排除することはできない。その理由は、一九七一年には第六巻と第七巻の二冊の「目録・解題」も刊行されているからである。第四に、帳簿の帳付け場所を「蛮族キュウセイイシマルの家」と解読したのは不正確ではある。だが、同時に、帳簿に書かれた漢字を「久生石円番屋」と判読したことが記されている（ただし疑問符が括弧書きで記されており、研究者として完全に確信はしていなかったようである）。漢字二つからなる最後の語の判読は正しかったが、解読は正確ではなかった。

そのことからロシア語への翻訳に誤りが生じた。二漢字語「番屋」の読みは「ばんや」であるが、その意味は「蛮族の家」ではなく、ある場合は「哨戒所」あるいは「守備兵」、また別の場合は場所、より正確に言えば、北海道、および、サハリンにある建屋で、そこには、アイヌ人による鯨、鮭の漁労を監視する日本人がいた。彼らは同じく土地の住民

の監視役でもあった。我が国の研究書で最もよく使われているのは「ноч【¹⁴】」の語の読み方は「post」、意味は「哨所」という用語である（例えば「ноч в Кусюн-котан」【読み方は「post v Kusyun-kotan」】意味は「クシユンコタンの哨所」）。裏表紙の表側に書かれた上書きの最初の漢字四文字の判別は誤りである。そこに草書で書かれているのは地名、他でもない「久春古丹（くしゅんこたん）」で、サハリン南部のアニワ湾に面した居住地である。一方、同じく草書で書かれた漢字六文字「久春古丹番屋（くしゅんこたんばんや）」は、ロシア語に翻訳すれば、先の「ноч в Кусюн-котан」【post v Kusyun-kotan】を意味するが、この「kotan」読み方は「kotan」コタン）はアイヌ語では「ceenne」【読み方は「selenie」で意味は「村落」】を意味するので、ロシア語に翻訳すれば「ноч в поселении Кусюн」【読み方は「post v poselenii Kusyun」】（久春村の監視所）となるだろう。

「監視所」についてロシアの研究書の中で最初に説明を与えたのは、ドミートリー・マトヴェエヴィチ・ポズドネエフである。ポズドネエフはエコイ某（「エコイ」ではなく「ヨコイ」か？ V・クリモフ注）の日記『エゾ探訪記「ポズドネエフはこの語を「Ezo」と表記したが、正しくは「Edzo」、V・クリモフ注』に則り、そこで述べられていることを以下のように引用している。

「エゾ人のすべての村落に柱と屋根のみから成る建屋がある。これらの建物はウネヨオヤ「ウンジョーヤ」、つまり、運上屋か？ V・クリモフ注¹⁴」であり、規模の小さなものはバンヤである。この小規模の建物に居住しているのは下級監視役（バンニン）で、大規模な建物に居住しているのは上級監視役（シハイニン）である。彼らはすべて、エゾ人の生活を見張り、農作業や漁労をさせている。一方、これらの人々、つまり、番人と支配人は、徴税人の支配下に置かれている。それら徴税人の

中でも裕福な商人は、何よりもまず、魚に対する税金を松前のダイミヨウ【大名】に納入することが義務づけられており、その代償として彼らは一定の区域での漁労権を得ている。このように、ダイミヨウとその家来たちは何ひとつすることなしに利益を受け取っている。彼らは貢納金の滞納ということに気をもむこともない。その理由は、貢納金によって支払われているからである。このように、蝦夷人に関係する事柄はすべて徴税人によって取り決められている。徴税人は徴税人で自分たちのもうけのことしか考えていない¹⁵。」

番号A・四七の帳簿の表題頁に「大福帳」と三つの漢字が書かれている（読み方は「だいふくちょう」、ロシア語に逐語訳すれば「Тетрадъ болъ шово достатка」【読み方は「Tetrad' bol'shovo dostatka」】、意味は「大きな裕福の帳面」）。

これについて、日本で権威ある『国史大事典』（意味は「祖国の歴史大百科事典」）では次のような説明がなされている。

この名称の帳簿が最も広く普及したのは徳川時代（一六〇三—一八六八）、および明治時代（一八六八—一九二二）、大正時代（一九二二—一九二六）である。この帳簿には、商家の扱う品目、財政状態が反映されている。原則的にこの帳簿は、個々の顧客毎の計算・管理帳として使用され、記載されていたのは、掛け買いに対して支払うべき代金がある場合、つけの解消と残金、言い換えれば、取引の差引残高である。当座預金口座の帳簿（「当座帳」、読み方は「とうざちよう」）、販売帳簿（「売帳」、読み方は「うりちよう」）、現金収支の帳簿（「金銀出入帳」、読み方は「きんぎん でいりちよう」）から、顧客・取引先毎の勘定記録、販売された品目と数量、諸経費、代価が転記され、当該会計期間の勘定に従って販売価格を総計し、顧客・取引相手に請求書を送り、清算されたつけの部分に対応の帳面頁上で削除し、その後に、以降の販売すべて

が書き留められ、同様の方法で収支の総計が出されていた。

このように帳簿「大福帳」は、その時点でのすべての顧客や取引相手に関する総合的な元帳の役割を果たしていた。大福帳は六二三葉、あるいは一二四六頁から成る。ただし、すべての頁に書き付けがなされているわけではない。

更に、ロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所写本部に保存されている「日本の写本、木版本、古印刷本目録・解題」第五巻の中で、ヴラジスラフ・ニカロロヴィチ・ゴレグリヤドは次のように記している。

「一〇六

A-四八 (CI.XVIII №76)⁽¹⁶⁾

簾貸帳 (れんたいちよう Remacho:)

貸借書付帳

言語は日本語

債務者の日毎の記録。債務者の居住地、つげに回された、あるいは、代金分割払いの商品の名称と数量を併記。債務者の名前(全部で二四名)、フレクンケマ、コノシベ、セキリバ、ノエシユウ、ヌンカリマ、マトマ、その他(すべて片仮名書き)は、おそらくアイヌの名前であろう。地名(ヤマンペチ、シレトコなど)から判断するに、帳簿が書き留められたのは北海道島の南部であろう。商品の主なものは、煙草、針、茶、竹製品、および、金属製品。消去された債務は削除されている。記録が記入されたのは一八〇五年(文化二乙丑歳)の秋、時期は八月から二月までである。帳簿の最後に、一八〇六年の始め(寅ノ巳月)への繰り越し一覧がある。

三ヶ所に帳簿の帳付け場所が次のように記されている。

久生石田番屋(「蛮族キュウセイイシマルの家」(?))の意味か)
写本一八〇五―一八〇六年

「M・S・プロッセ・コレクション」サンクトペテルブルグ一八六四年一二・五×三二ノート一冊一一九葉。ほとんどの葉は白紙。丁付けなし。紙は日本紙。ソーシヨ【草書か】、変体仮名、カタカナ(名、名称)。「硬い」表紙なし。仮綴本。

欠陥について。全体は劣化し、多くの葉はぼろぼろ、本文部分で穴開き。⁽¹⁷⁾

二番目の帳簿は、もう一冊と比べて分量がやや少なく、オーピシ【シリーズ】番号は一〇六番、所蔵番号はA-四八。名前は漢字で書かれ「簾貸帳」、読み方は「れんたいちよう」あるいは、「すだれ かしちよう」。あるいは、直訳に近くロシア語に翻訳すれば、「葦で編まれた」莫座を貸した「商品、つげの」帳面。分厚い日日辞典である『広辞苑』は「竹で編まれている」との説明を付けている。一方、巻数の多い厚い辞典で日本語の百科事典である『国語大辞典』は、より詳細な説明文の中で、竹だけではなく、葦でも、当該目的のために利用できる、と書いている。V・N・ゴレグリヤドはこの帳簿の特徴を詳述することなく「貸借書付書」という意味のおおよその意識を与えた。その名称は、実際、多くの帳簿関係の帳面に実質的に適用しうるものである。【ロシアの】日本学研究者【であるゴレグリヤド】は、日本の交易品の担保としてつけ売したのは二四人と指摘している。またもや間違がある。帳付け場所は「北海道の南部」としているが、地名から判るようにサハリンである。この帳簿は一一九葉、二三八頁である。一部白紙がある。

V・N・ゴレグリヤドは一八〇五―一八〇六年の二冊の帳簿の目録作成・解題をする際、M・F・ブロッセ・コレクションを参照している。

この目録は、一八四〇年にブロッセによりフランス語で編成され、サンクトペテルブルグの科学アカデミー・サンクトペテルブルグ支部の文書館に保存されていた。¹⁸⁾ここで、アジア博物館が一八四〇年ネヴァ川のほとりにある現在のクンストカメラ【正式名はピョートル大帝名称人類学・民族学博物館】の建物から科学アカデミーの新しい建物（関税小路通り二号館）一階に移転したことを指摘することは無駄ではない。目録第一八組、「その他（Melanges）」と題された中の第七六番に「商人により編集された本（『Livres de competu Merchands』）（A・二七二―二八）」「簾貸帳 文化二 一八〇五』、『大福帳 文化九年 一八一二』がある。ブロッセは第七六番という一つの番号に、読み方を入れることなく漢字名を記し、二冊の帳簿を登録した。これ以外に、ブロッセは『大福帳』が帳付けされた年を間違って文化九年西暦一八一二年としてしまった。だが、これは、大量のアルメニア、グルジアの写本や古印刷本のコレクションが収蔵された年である。この目録から判断する限り、そこに挙げてある日本語、朝鮮語の文献はわずかなものであり八九―九七葉裏の部分に存在すること、九七葉裏は写本の最終葉になることが判る。そこにある写本は主として中国語の文献である。一九二六―一九二七年、アジア博物館ではブロッセ目録に従い収蔵品の照合が実施されたが、このことは、責任者の検分が実行された記録とスタンプにより立証される。

ブロッセはアジア博物館の中国文庫に付いての報告の中で、同文庫の

目録の位置付けを次のように生き生きと明確に示した。

「著名な国民文学は、その国民の知的生活の絵画だという考えの上に立つとすると、研究者であるアカデミー会員は図書館の目録をその絵の額縁である考えている。¹⁹⁾【原文ロシア語は旧字表記】

同報告書の中で、ブロッセは、日本と朝鮮の書物について、中国文庫の目録の最後の第一八組の中で、日本と朝鮮の書物を他と区別し、その存在に言及したのみである。とりわけ、次のように書いている。

「第一八組 日本、朝鮮の書物。そのうちのいくつかが素晴らしい。古銭に関する書物はその明白さにより、挿絵と文章のあるいくつかの書物はエッチングの美しさにより、それぞれ注目に値する。日本の書物は連番の番号だけが付けられている。しかしながらそれらは大規模な中国の目録の中のグループとしておかれている。この部門は古銭学部分と地理、地図でのみ豊富である。その中に日本総地図の注目すべき優れた写しである第一四番がある。同類の地図の取得は困難であることがますますその地図の価値を高める。²⁰⁾【原文は旧字表記】

ここで、ブロッセ自身に付き、二言、三言述べる必要がある。一八三七年、フランス人マリー・イワノヴィチ（マリー・フェリシテ）・ブロッセ（Brosse）はアジア博物館で勤務を始めた。サンクトペテルブルグ科学アカデミーの招聘でブロッセはサンクトペテルブルグにやってきたのだ。ブロッセを招聘したのは、国民啓蒙大臣【ロシア帝国の宗教統制政策と国民公教育を担う国民啓蒙省（一八〇二―一八一七、一八一七―一九一七）の大員】で科学アカデミー総裁であるセルゲイ・セミヨノヴィチ・ウヴァロフ（一七八六―一八五五）であり、東洋文献学の不完全部分を補うためであった。ブロッセはパリで生まれ育った。中国語を学び、アルメニア文学、グルジア文学に転身した。当時、誰一人として、この問題に取り組んでいなかったからである。その後、ロシア語を

学んだ。プロッセはコーカサス諸民族の歴史と文化の押しも押されぬ専門家になった。その努力により、アルメニア語とグルジア語の写本と古印刷本の極めて豊富なコレクションが収集された。

プロッセは写本の個人収集家ではなかったし、日本語も使いこなせなかった。この学者の献身的な努力に敬意を表しているオリガ・ペトロヴナ・ペトロヴァの断言は誤解を招く可能性がある。

「[日本] フォンドの構成に入っているその他のコレクションの中で注目すべきものは、一八三七年にロシアを訪れ、それから生涯にわたりロシア学界で活躍することになるフランス人コーカサス学研究者マリ・フェリシテ・プロッセ（一八〇二—一八八〇）のコレクションである。M・プロッセは科学アカデミーアジア博物館で働きながら、アジア博物館の写本コレクションの充実に多大な貢献をした。プロッセの数々のコレクションは一八六四年に博物館に入った。⁽²¹⁾」

繰り返すが、プロッセはそれらコレクションを所有してはいなかった。だが、東洋学の専門家として目録を作ったり解説を書いたりしたの
で、その後、日本コレクションのみならず、後続の一連のコレクションにはプロッセの名前が付けられた。例えば、一八三六年、一八三八年、アジア博物館は、中国、モンゴル、満州の写本、さらには、日本都市の大縮尺図のほとんど大部分を【本職は外交官、アレクサンドル・セルゲエヴィチ・プーシキンの親しい友人、】中国学者であるパーヴェル・リヴォヴィチ・シリング・フォン・カンシユタツト（一七八六—一八三七）から購入した。⁽²²⁾ M・I・プロッセは、それらを処理し、博物館の登録簿、目録に入れた。⁽²³⁾

3 アジア博物館から東洋学研究所へ

一八一八年アジア博物館が創設された後、長い間、館長であるフリス

チアン・ダニロヴィチ・フレン（一七八二—一八五一）以外に、総計でたった二名の常勤職員しかいなかった。館長は、必要に応じて、時折、写本、木版本、書物のフォンドの目録作成を行うために、他の機関から専門家を招聘した。このようにして、外務省の中国学専門家で通訳のP・カーメンスキー、S・リボヴツォフ等の努力により、日本の写本、木版本の目録が作成された。当然のことながら、両人は日本語を知らず、日本の歴史、文化、文学を深く研究した専門家ではなかったために、不正確さを許した。興味深いことは、アジア博物館初代館長であるCh・D・フレン【名前の頭文字は、当人がドイツ系であるために（Christian Martin Fahn）「Ch」としたが、国際式、英米式のロシア文字音写の表記では「Kh」となる】の興味は古銭学分野にあったことであるが、それは博物館のフォンドに根本的な方向性を与えることになった。⁽²⁴⁾

一八四二年、アジア博物館第二代館長になったのは、近東の専門家であるボリス・アンドレエヴィチ・ドルン（一八〇五—一八八一）である。博物館に献じた論文の中で、ドルンは次のように書いている。

「アジア博物館は一八一八年一月一日に設立された。博物館の収蔵物に入った学術コレクションの始まりは、アカデミーを創設したピョートル大帝が自身の興味を東洋研究に向けた、前世紀の最初の四半世紀にさかのぼる。ピョートルの治世下に、中国、満州、日本、モンゴル、チベットの作品の…コレクションの始まりが置かれた。これらはすべて、当時も、その後も、大帝により設立されたクンストカーメラに保管された。それ以来、付属目録から判るように、このような購入は続いていた。このことは私の著作に詳細にわたって述べられている。⁽²⁵⁾」

ドルンが引き合いに出しているのは、ドイツ語で書かれた自身の出版物『帝室サンクトペテルブルグ科学アカデミーアジア博物館 サンクトペテルブルグ 一八四五年 フォン・B・ドルン』である。⁽²⁶⁾

表 1

No.	日本の書物	書物	巻	ダブリ 【Дуплеты】
28.	小店の商いの勘定書本一冊 【「勘定書」の部分、現代とは綴りが違う。クリモフ注】	1		
29.	商いの小店の本	1		

(注 29)

一八一九年の部分で、ドルンは、科学アカデミー総裁の指示により、外務省の通訳カーメンスキーとリポヴツォフ（原文にはドイツ語でそれぞれ Kamensky と Lipovzov）書かれている）が中国、満州の写本に目録を作成したと書いている。そして、「日本書物の：カタログ」も作られたことは、ただ引用文からのみ判る。⁽²⁷⁾これは驚くにはあたらぬ。日本コレクションの目録は、五七頁あるカタログの内、たった二頁半しかないからだ。そして、この「日本書物」のカタログは専門の日本学研究者により作られたものではないため、不十分であり、その中には間違いがある。

さらにドルンは、中国、日本の木版本、写本が保管庫に一三六九保存単位保管されていると指摘している。換言すれば、日本の木版本と写本は、区別されより分けられることなく、中国の木版本や写本と一緒に保管されていた。⁽²⁸⁾まさにこれが、研究者にとりある一定の困難さをもたらす。

初期の館長たちは近東諸国に多くの注意を割いた。そのため、まず最初に、同地域の諸国のフォンドのカタログと目録・解題が作成された。一八四〇年になってようやく、M・I・ブロッセが中国、日本、満州の書物のカタログを作成したが、公刊されないままに終わった。

作られた当時出版されなかったブロッセのカタログとは違い、パーヴェル・カーメンスキーとス

テパン・リポヴツォフのカタログは出版された。五七頁からなる印刷版目録の中で、「日本の書物」はわずかな部分しか占めていない。五三頁から五五頁である。我々が今問題にしている帳簿は、目録最後の頁である五五頁にあり二八番、二九番の番号が付けられている（表 1）。

外務省通訳パーヴェル・カーメンスキーとステパン・リポヴツォフにより作成された印刷版カタログから引用した上記の記述から判るように、帳簿に関する説明は一切ない。実際問題、構成は単に露米会社の登録簿からの記述を繰り返したに過ぎない。

パーヴェル・イワノヴィチ・カーメンスキー（掌院ピョートルでもある）（一七八五―一八四五）とステパン・ヴァシリーエヴィチ・リポヴツォフ（リポヴツォフの「ツォ」は二種類の表記の仕方がある）（一七七〇―一八四一）は、一八一九年、つまり、中国・日本コレクションのカタログが作られた翌年、東洋の文学と古美術品の分野に関して、ペテルブルグの帝室科学アカデミーの特派会員に選ばれた。その他、P・I・カーメンスキーはパリ王立アジア協会、コペンハーゲン古美術品協会、学問芸術愛好者自由協会の会員でもあった。

晩年の一八四〇年、カーメンスキーは日記に次のように書いている。「ああ、中国よ、お前は私からなんと多くの貴重な時間を奪ったことか。なんと二七年間が、機械的に、お前の仕事にだけに費やされた。唯一のなぐさめは、その貴重な時間は任務にだけに費やされたということだ。もし、そうでなかったら、どんなに嘆いたところで、流した大量の涙だけでは、嘆き切ることは、不可能であったことであろう。⁽³⁰⁾」

このように、O・P・ペトロヴァは、解説を記述するのに十分な材料を持っていなかったものと思われる。次のように述べる。

「東洋学、クリモフ注」研究所で保管されている日本の写本、木版本、古印刷本の目録・解題は、ロシア科学アカデミー一〇〇周年記念で

のS・G・エリセーエフにより作成された『概要(サマリイ)』の中にある日本フォンドの控えめな概観を唯一の例外として、ロシア語で出版されたいかなる種類の論文や書籍にも、完全なものはもちろん、部分的なものもない。S・G・エリセーエフは自己の短い概観の中で、一般の図書館から写本と木版本のフォンドを選出せず、東洋学研究所のアルヒーリノフが一七八二年に編纂した「日露語彙」【Японский лексикон】ただしタリノフの辞典の原題は「ЛЕКСИКОНЫ」やニコライ・レザノフが一八〇五―一八〇六年に編纂した二冊の日本語・ロシア語辞書、さらに、レザノフの日本語学習用の教材も含めて、ロシア語のもののみ、記述した。このようにして、初めて、研究所所蔵の日本の写本、木版本、古印刷本が目録に記載された。⁽³¹⁾

実際、O・P・ペトロヴァ、V・N・ゴレグリヤド、G・D・イワノヴァ、一九八〇年代の後半アメリカ合衆国に移民したZ・Ja・ハニン等の努力により、このような六巻ものの完全な解題が初めて作られた。とはいえ、この時点まで、まったく、目録がなかったわけではない。

まず、第一に、アジア博物館が創立された年に編纂されたリポヴツォフとカーメンスキーのカタログに言及する必要がある。このカタログは、科学アカデミーから博物館の保管庫へ移管されたすべての品目の貸借一覧目録表のようなものと考えてよいだろう。「目録・解題」第四巻の序で編集者たちは「古いロシアのカタログ、すなわち、ブッセのもの(一七九八年)、パーヴェル・カーメンスキーとステパン・リポヴツォフのもの(一八一八年)を利用することができた」と述べている。⁽³²⁾

アジア博物館が設立されてから一〇〇年後の一九二〇年、ペトログラードで、アジア博物館所蔵の写本、木版本、その他いろいろな物品類でアジア諸国に関するものの詳細目録である『概要(サマリイ)』が発

行された。序の中で、館長でアカデミー会員のS・オリデンブルグは次のように記している。

「一九一八年一月一日にアジア博物館は創設から一〇〇年の節目を迎えた。博物館の研究職員たちは『概要』の作成を以てこの節目を記念することにした。この『概要』には、創設当初から一九一八年に至るまでの博物館のために逐次収集されてきた写本や書物に付いての主たる情報を収めるものとし、ロシア科学アカデミーがその出版を決定した。『概要』の作成が開始された後、博物館は多くの新たな蒐集品を受け入れた。だが、世界で最も豊富な東洋古籍文献の集成の一つである博物館のコレクションの系統的な解題作成は、収容スペースの不足により滞っている。古い空間は今では博物館の要請に答えられず、新しい場所は博物館のために既に建設されているものの、アカデミーの管轄下に入ることが出来ないでいる。それに加えて、博物館には暖房手段がなく、蒐集品に極めて有害な湿気の発生という結果をもたらしている。」⁽³³⁾

ようやく一九二五年、アジア博物館は、ビルジェヴァ・リニヤ【日本語の案内書等では「証券所通り」とも】一番地の科学アカデミー図書館新館への移転を開始したが、それが終了したのは一九二七年の初めにかけてであった。面積は四倍に増え二六四五平方メートルとなり、スタッフも研究職員六名、技術職員二名から、研究職員一九名、技術職員四名、実習生二名になった。⁽³⁴⁾一九三〇年、アジア博物館は東洋学研究所へと改組された。⁽³⁵⁾

一九一八年からアジア古文書部門【Азиатский Архив】の研究職員で主任であったセルゲイ・グリゴリエヴィチ・エリセーエフ(一八八九―一九七五)が、日本フォンドを対象とした部分の目録・解題作成を委託された。自身の論文の中でエリセーエフは、二冊の帳簿についてその存在にすら言及しておらず、館長のドルンがドイツ語で書いた著作のみを

引用している。⁽³⁶⁾

「二八一年、P・カーメンスキーとS・リポヴツォフが日本と中国の書籍カタログを作成した。一八四〇年、科学アカデミーの委嘱で、科学アカデミー会員プロッセにより日本と中国の書籍カタログが作成され、その中にそれまでの蒐集品がすべて含まれた。」⁽³⁷⁾

一九一七年、アジア博物館が設立されて以来初めて、そのスタッフに日本を専門とする研究者が加わった。その任に当たったのがペトログラード大学専任講師セルゲイ・グリゴリエヴィチ・エリセーエフである。S・G・エリセーエフはペテルブルグ大学の卒業生で、ベルリン大学に在学後（一九〇七―一九〇八）、東京大学を卒業した（一九〇八年から一九一二年に学部、一九一二年から一九一四年に大学院）。⁽³⁸⁾ まもなく、エリセーエフは、予想される迫害から身を守るためにペトログラードからフィンランド、更にフランスに脱出した。その後アメリカ合衆国に移住し、ハーバード大学で長年にわたり教授を務めた。

言い換えれば、事実上一〇〇年の間、アジア博物館のスタッフには専門の日本研究者は一人もいなかったということである。

レオニード・イオカキモヴィチ・チュグエフスキー（一九二六―二〇〇〇）は以下のように記している。

「一九一八年にアジア古文書部門 [Азиатский Архив] [アジア博物館付属、V・クリモフ注] の主任を委嘱されたセルゲイ・グリゴリエヴィチ・エリセーエフは、保存されているその記録から判断しうる限りでは、一年強の期間に相当数の史料を登録した。エリセーエフの目録・解題作成は、それまでの担当者の解題と同様、何よりも第一に古文書史料の地誌的仕分け [топографирование] を主眼にし、純粋に登録のための記述を目指していたことは確かである。だが、その一方で、それぞれの史料群の中身の解明レベルに関して言えば、古文書の体裁と物理的狀態

を始めとするさまざまな諸事情次第であった。その事情の中には、極端な場合、例えば、トルキスタンの方言研究のための史料が含まれているA・L・クンが遺したものの解明という課題を与えられた日本研究専門の登録者が、いったい何をなしたのか、いかなる可能性を持っていたのかというものもあった。」⁽³⁹⁾

一九一九年には、モンゴル研究者であるV・L・コトヴィチが古文書部の主任を務めるようになった。アジア博物館は、それぞれが自分の専門にのみに携わることができると十分な人数の専門家を抱えていたことはこれまでなかった。従って、中国、日本、朝鮮に関する目録作成をコーカサス研究者のM・I・プロッセが行い、日本研究者のS・G・エリセーエフがトルキスタンに関する目録作成をせざるをえなかったのである。

4 帳簿研究の現在

さて、二冊の日本の帳簿はアジア博物館に創設当初から所蔵されていた（P・カーメンスキーとS・リポヴツォフのカタログ、プロッセ・コレクシオン、「日本の写本、木版本、古印刷本の解題」第五巻）。しかしながら、東洋古籍文献研究所の所蔵文書の中に、これらの帳簿がどこから入ってきたのかを示すものを見出すことはできなかった。アレクサンデル・ユーリエヴィチ・シニーツィン⁽⁴⁰⁾は、ロシア科学アカデミー・ペテルブルグ支部の所蔵文書の中から自身が発見した、いわゆる「帝室科学アカデミーのクンストカーメラにも送付している露米会社へ帰属する日本物品目録」を最初に公刊した。日本物品目録は、文書の左上隅にフランス語で日付（一八一四年四月六日）が、下部にはロシア語で別の日付（一八一四年六月一六日、日と月は文字がはつきりしない）がそれぞれ記されている。以下、「目録」を引用する（表2）。

表 2

4月6日提出【Presente le 6 Avril】	
1814年	
目録	
帝室科学アカデミー・クンストカーメラにも送付している露米会社に帰属する日本物品	
数量	内訳：
2	サハリン島アニワ湾にあった偶像の入った堂【厨子】。
1	木蠟燭の入った漆の箱。
1	僧侶用ちりばめられた貝。
1	僧侶用の帽子。
7	書籍。内容は様々、それぞれに露米会社の印。
2	商いの帳簿〔下線はV.クリモフ〕。
1	大竿秤【Кантра (注41)】。
[リストには更に6つの品物が列挙してあるが、いずれも日本とは関係のないものなのでここでは引用していない。V.クリモフ注]	
筆頭支配人 [署名]	
6月16日 [?]	
1814年	

(注42)

当時、露米会社の筆頭支配人は、ミハイル・マトヴェエヴィチ・ブルダコフ（一七六六一―一八三〇）であった。従って、一八一四年五月一日と一七日、帝室公共図書館【現在のロシア国立図書館（サンクトペテルブルグ）】に、ブルダコフが日本の書物と文書を総量で七保存単位贈与したと指摘する必要がある。寄贈品は公共図書館長アレクセイ・ニコ

コラエヴィチ・オレーニン（一七六三―一八四三）に渡された。⁽⁴³⁾

ブルダコフ自身素晴らしい個人蔵書を所有していた。一八一六年一月三十一日、帝室科学アカデミー特別会員に選ばれた。多くの点で、ブルダコフのキャリアは、一七九七年のシェリホフの末娘との結婚のおかげで形作られた。シェリホフ自身は一七九五年に他界している。ところで一方、ニコライ・ペトロヴィチ・レザノフはシェリホフの長女と結婚した。ブルダコフ、レザノフの両人は、露米会社の設立と本社とのサンクトペテルブルグ移転に寄与した。

このようにして、帳簿が、最初はサンクトペテルブルグの露米会社本社に入れられ、その後、科学アカデミーのクンストカーメラに移され、その後、アジア博物館の保存庫に移管されたことが明白になる。帳簿が、露米会社からロシア科学アカデミー・クンストカーメラ、その後、一八一八年に設立されたアジア博物館へと長い道のりを歩んできたことが判明する。実際にはその間ずっと、それらは、サンクトペテルブルグの大学河岸通りにある今日のクンストカーメラと同じ建物にあった。

M・M・ブルダコフへ帳簿を渡したのは【ママ】、サハリン島南端のクシユンコタンにある日本の哨所襲撃を敢行したニコライ・アレクサンドロヴィチ・フヴォストフ大尉（一七七六一―一八〇九）とガヴリール・イヴァノヴィチ・ダヴィドフ少尉（一七八四―一八〇九）である。

帳簿は一八〇五―一八〇六年の日付が記されている。この時期、ロシア使節、ニコライ・ペトロヴィチ・レザノフ（一七六四―一八〇七）が長崎に到着していた。使節の指令により、サハリンと今日の北海道の近島への二つの遠征が二隻の艦艇により行われた。二隻とはフヴォストフ大尉指揮下のブリック艦【フリゲート艦】ユノナ号とダヴィドフ少尉指揮下のテンデル艦アヴォシ号である。N・A・フヴォストフ大尉乗艦のユノナ号はアニワ湾に入り、クシユンコタン村の岸壁に上陸し、そこ

をリユヴォブイットヴォ【物好き、好奇心の意】とのロシア名を与えた。フヴォストフがその地に滞在したのは一八〇六年一〇月一〇日から一六日である。帳簿には、それ以降の日付の記録は確認できない。

フヴォストフとダヴィドフ兩名は、一方で海軍士官であり海軍省に所属し、他方、露米会社（一般に**RAK**【英語表記で**RAK**】と省略される）の勤務下にあった。日本の商館から持ち出された物品の目録を確定し、小店の帳面がいくつかあるかどうかを確定するためには、海軍文書館（現在のロシア国立海軍文書館）のアーカイヴに注意を向け、露米会社文書から文書による証拠が保存されている可能性を探ることができるかどうか確認することが合理的である。

海軍文書館のアーカイヴでは、フヴォストフ指揮下のユノナ号から積み下ろされた日本の物品の数々の押収目録を見つけ出すことができた。

押収はオホーツク港湾長官で海軍大佐イヴァン・ニコラエヴィチ・プハリン（一七六九―一八三四？）の命令によるものである。その「フリーゲート艦ユノナ号積み荷日本物品目録」には「海図と書物入りの小整理箱筒ひとつ。日本の言葉が書かれた板一枚」⁴⁴がある。それらの書物の中に、これまで言及してきた、我々にとって興味深い帳簿もまた入っていた可能性は排除できない。目録は急ぎで作られており、それを作った港湾のロシア人係員には理解できなかった日本の物品は詳しく説明されていない。要するに、帳簿を直接示すような記録はないということである。それは理解できる。物品を記載したロシア人は日本語を理解する能力はなかったのだ。

アレクセイ・アレクセエヴィチ・キリチェンコは論文「海賊船ユノナ号とアヴォシ号」の中で、ロシア帝国外交文書館にある露米会社に関するファイル・ジェーロに保管されている複数の文書にのっとり、ロシアにもたらされた物品の完全な目録を示している。⁴⁵これら二つの目録（ロ

シア帝国外交文書館、ロシア国立海軍文書館の目録中）には、どこにも、我々にとって興味のある二冊の帳簿が言及されるような特別なものは何もない。

おわりに―日本学研究所と日本コレクション―

このようにして、帳簿研究の歴史は、ロシアにおける日本学の確立と発展の歴史、および、日露関係史と最も直接的な形で結びついている。一八一八年にアジア博物館が設立されたとは言え、同博物館にある東洋諸国からもたらされた写本、木版本、古銭、様々な物品すべてを広範囲に研究するには、博物館の職員は明らかに不十分であった。そして、その役割は、保管されている品物のカタログと目録を作成することに限定されていた。それでも、たとえば、外務省アジア局の専門家たちの応援を借りざるを得なかった。

東洋学研究所がレングラードからモスクワに移転した後、⁴⁶（移転は一九五〇年に始まった）、研究職員は一〇〇〇人にまで急増した。アメリカ合衆国との世界的な対立【冷戦のこと】は、学問分野、とりわけ日本学にまでも影響を与えた。対立の結果、東洋学研究所レングラード支部の職員たちによってすべてのコレクションの目録が作成され公刊される決定がなされた。このようにして、一九六三年から一九七一年にかけて、日本コレクションの六巻ものの目録・解題が出版された。

二一世紀には、もっぱらに一次史料に基づく偏向のない客観的な研究のための新しい可能性が開けた。東洋古籍文献研究所に保管されている帳簿を綿密に研究する時期が到来した。ロシアに起こった政治的变化【ソ連邦崩壊のこと】、および、ロシア科学アカデミー付属東洋古籍文献研究所と東京大学史料編纂所との協力のたまものとして、イデオロギーや政治的立場から離れた研究が可能となった。

●文献一覧 Список литературы

1' トーカニチキョウシキョク

Архивные материалы и письменные источники

- 1 АВ ИВР РАН. Фонд 24, ед. хр. 14. Дневниковые записи. 1840 г. 253 лл.
- 2 АВ ИВР РАН. Фонд 152, опись 1. Ед. хр. 5. Азиатский музей. Выписки из протоколов общего собрания Академии Наук и переписка с академическими учреждениями и частными лицами о комплектовании Азиатского музея. Начато: 1 октября 1861 г. Окончено: 21 января 1865 г.
- 3 Catalogue des livres et manuscrits Chinois, Mangleshous, rolyuglottes, Japonois et Coréens de la bibliothèque du Musée Asiatique de l'Académie Impériale des Sciences rédigé par M. Brosset // СПбФ АРАН. Ф. 789. Оп. 1. Ед. хр. 6. Л. 1-97.
- 4 Броссе. Отчет экстраординарного академика Броссе о китайской библиотеке Азиатского музея Императорской Академии наук. // Журнал министерства народного просвещения. Часть XXX. / III. Известия обь отечественных ученых и учебных заведениях. Санктпетербург, в типографии Императорской Академии Наук. 1841. 22 с.
- 5 Ресстр японским вещам, принадлежанием Российско-Американской Компании, которая и препровождает в Кунсткамеру Императорской Академии наук. Рукопись. ПФА РАН, фонд 1, о. 2, 1814, № 37, §117, л. 1 - 3.
- 11' 丑亥録
Литература
- 9 Свод законов "Тайхорэ" 702 - 718 гг. I - XV законы/Всугупительная статья, перевод с древнеяпонского и комментариев К.А. Попова. М.: Главная редакция восточной литературы издательства "Наука". 1985. 368 с.
- 7 Свод законов "Тайхорэ" 702 - 718 гг. XVI - XXX законы/Всугупительная статья, перевод с древнеяпонского и комментариев К.А. Попова. М.: Главная редакция восточной литературы издательства "Наука", 1985. 268 с.
- 8 Азиатский музей Российской Академии Наук 1818 - 1918. Краткая Памятка. Петербург: Российская Государственная Академическая Типография. Вас. Остр., 9 линия, №12, 1920. 116 с.
- 6 Васильева О.В. "В пользу Императорской Публичной Библиотеки...": приращение фондов восточными манускриптами в 1812 - 1814 гг.//Страны и народы Востока/Выпуск XXXV: колллекции, тексты и их "биография"/ Под ред. И.Ф. Поповой, Т.Д. Скрынниковой. М.: Наука. Изд-во Восточная литература, 2014. С. 61 - 81.
- 10 Горегляд В.Н. Описание японских рукописей, ксилографов и старопечатных книг. Выпуск V. М.: Изд-во "Наука". Главная редакция восточной литературы, 1971. 134 с.
- 11 Горегляд В.Н., Ханни З.Я. Описание японских рукописей, ксилографов и старопечатных книг. Выпуск VI. М.: Изд-во "Наука". Главная редакция восточной литературы, 1971. 196 с.
- 12 Горегляд В.Н. Япноведение//Азиатский музей - Ленинградское отделение института востоковедения АН СССР. М.: Изд-во «Наука» Главная редакция восточной литературы, 1972. С. 186 - 201.
- 13 Даль Владимир. Толковый словарь живого великорусского языка в 4 тт. Т. 2. И - О. М.: ТЕРРА, 1994. 784 с.
- 14 Каталог Китайским и Японским книгам, в Библиотеке Императорской Академии Наук хранящимся, по препоручению Господина Президента оной Академии, Сергея Семеновича Уварова, вновь сделанный Государственной Коллегии иностранных дел Переводчиками, Коллежскими Ассессорами: Павлом Каменским и Степаном Липовцовым. [СПб., 1818]. 58 с.
- 15 Кириченко А.А. Пиратские корабли "Юнона" и "Авось"// Информационно-аналитический бюллетень № 8. Специальный выпуск. Апрель 2001 г. 16 с.
- 16 Климов В.Ю. Из истории отношений японцев и айнов (конец XII - начало XIX вв.) //Айны в истории российской-японских отношений XVIII - XIX вв. Коллективная монография/под ред. В.В. Щепкина. Ин-т восточных рукописей РАН. СПб.: Изд-во "ЛЕМА", 2020. С. 8 - 77.

- 17 Климцова О.В. Глава 4. Записи об айнах в журнале Н.А. Хвостова в ходе экспедиции на Сахалин 1806 г./Айны в истории российско-японских отношений XVIII - XIX вв. Коллективная монография/под ред. В.В. Щепкина. Ин-т восточных рукописей РАН. СПб.: Изд-во "ДЕМА", 2020. С. 183-213.
- 18 Петрова О.П., Горетляд В.Н. Описание японских рукописей, ксилографов и старопечатных книг. Выпуск 1. М.: Изд-во восточной литературы, 1963. 246 с.
- 19 Петрова О.П., Иванова Г.Д., Горетляд В.Н. Описание японских рукописей, ксилографов и старопечатных книг. Выпуск 2. Филология. М.: Изд-во «Наука», Главная редакция восточной литературы, 1964. 234 с.
- 20 Петрова О.П., Горетляд В.Н. Описание японских рукописей, ксилографов и старопечатных книг. Выпуск 3. Идеология. М.: Изд-во «Наука», Главная редакция восточной литературы, 1966. 175 с.
- 21 Петрова О.П., Горетляд В.Н. Описание японских рукописей, ксилографов и старопечатных книг. Выпуск IV. М.: Изд-во «Наука». Главная редакция восточной литературы, 1969. 173 с.
- 22 Попова И.Ф. От Азиатского музея к Институту восточных рукописей РАН: собиратели и исследователи рукописной книги народов Востока// Азиатский Музей. Институт восточных рукописей РАН. Путеводитель. М.: Изд-во восточной литературы, 2018. С. 5-47.
- 23 Саницын А.Ю. Предметы из материалов экспедиции Н.А. Хвостова и Г.И. Давылова в собрании МАЭ РАН/Интиро кансай сифэ:о мэгуро кокусэй кэнкю: сюкай 2010 (日本学十院・東京大学史学編纂部 = Международная конференция, посвященная историческим материалам по русско-японским отношениям). Токио: Нихон гакуссин - То:кё: дайгаку сифэ: хэнсандзё (日本学十院・東京大学史学編纂部 = Японская Академия наук - Историкографический институт Токкийского университета), 2010. С. 1 - 10 (на русском языке); С. 11 - 22 (на японском языке).
- 24 Танимото Акихиса. Конторские книги в торговле с айнами Сахалина// Николай Невский: жизнь и наследие: сборник статей/сост. и отв. ред. Е.С. Бакшеев и В.В. Щепкин; Институт восточных рукописей РАН, Российский институт культурологии СПб.: Филологический факультет СПб-ГУ, 2013. С. 149 - 156.
- 25 Чугуевский Л.И. Архив востоковедов (бывший Азиатский архив) // Письменные памятники и проблемы истории культуры народов Востока XXXIII годичная сессия ИО ИВ АН СССР. Материалы по истории отечественного востоковедения. Часть III. М.: Наука. Главная редакция восточной литературы, 1990. С. 5 - 128.
- 26 Dopf V. Das Asiatische Museum der Kaiserlichen Akademie der Wissenschaften zu St. Petersburg. SpB., 1846.
- 註
- (一) Свод законов «Гайхорё» 702 - 718 гг. XVI - XXX законы/ Вступительная статья, перевод с древнеяпонского и комментариев К.А. Попова. М.: Главная редакция восточной литературы Изд-ва «Наука», 1985. С. 79.
- (二) Танимото Акихиса. Конторские книги в торговле с айнами Сахалина// Николай Невский: жизнь и наследие: сборник статей/сост. и отв. ред. Е.С. Бакшеев и В.В. Щепкин; Институт восточных рукописей РАН, Российский институт культурологии СПб.: Филологический факультет СПб-ГУ, 2013. С. 150.
- (三) Попова И.Ф. От Азиатского музея к Институту восточных рукописей РАН: собиратели и исследователи рукописной книги народов Востока// Азиатский Музей. Институт восточных рукописей РАН. Путеводитель. М.: Изд-во восточной литературы, 2018. С. 42.
- (四) Горетляд В.Н. Описание японских рукописей, ксилографов и старопечатных книг. Выпуск V. М.: Изд-во «Наука». Главная редакция восточной литературы, 1971. С. 5.
- (五) Горетляд В.Н. Описание японских рукописей, ксилографов и старопе-

- 出た書. 山田 隆夫. 1971. 132 p.
 (6) 同上. 山田 隆夫. 1971. 132 p.
 (7) 山田 隆夫. 1971. 132 p.
 (8) 山田 隆夫. 1971. 132 p.
 (9) 山田 隆夫. 1971. 132 p.
 (10) 山田 隆夫. 1971. 132 p.
 (11) 山田 隆夫. 1971. 132 p.
 (12) 山田 隆夫. 1971. 132 p.
 (13) 山田 隆夫. 1971. 132 p.
 (14) 山田 隆夫. 1971. 132 p.
 (15) 山田 隆夫. 1971. 132 p.
 (16) 山田 隆夫. 1971. 132 p.
 (17) 山田 隆夫. 1971. 132 p.
 (18) 山田 隆夫. 1971. 132 p.
 (19) 山田 隆夫. 1971. 132 p.
 (20) 山田 隆夫. 1971. 132 p.
 (21) 山田 隆夫. 1971. 132 p.
 (22) 山田 隆夫. 1971. 132 p.
 (23) 山田 隆夫. 1971. 132 p.
 (24) 山田 隆夫. 1971. 132 p.
 (25) 山田 隆夫. 1971. 132 p.
 (26) 山田 隆夫. 1971. 132 p.
 (27) 山田 隆夫. 1971. 132 p.
 (28) 山田 隆夫. 1971. 132 p.
 (29) 山田 隆夫. 1971. 132 p.
 (30) 山田 隆夫. 1971. 132 p.
 (31) 山田 隆夫. 1971. 132 p.
 (32) 山田 隆夫. 1971. 132 p.
 (33) 山田 隆夫. 1971. 132 p.

- (20) Броссе. Там же. С. 21.
- (21) Петрова О.П. Введение//Петрова О.П., Горегляд В.Н. Описание японских рукописей, ксилографов и старопечатных книг. Выпуск 1. М.: Изд-во восточной литературы, 1963. С.5.
- (22) Там же. С. 5.
- (23) М.П. Волкова. Описание маньчжурских рукописей института народов Азии АН СССР. Издательство «Наука», ГРВИ. М., 1965. С. 3-4. Петрова О.П. Введение//Петрова О.П., Горегляд В.Н. Описание японских рукописей, ксилографов и старопечатных книг. Выпуск 1. М.: Изд-во восточной литературы, 1963. С.5.
- (24) Попова И.Ф. От Азиатского музея к Институту восточных рукописей РАН: собратели и исследователи рукописной книги народов Востока// Азиатский Музей. Институт восточных рукописей РАН. Путеводитель. М.: Изд-во восточной литературы, 2018. С. 8-9.
- (25) АВ ИВР РАН. Фонд 152, опись 1. Ед. хр. 5. Азиатский музей. Выписки из протоколов общего собрания Академии Наук и переписка с академическими учреждениями и частными лицами о комплектовании Азиатского музея. Начало: 1 октября 1861 г. Окончено: 21 января 1865 г. Л. 80.
- (26) Там же.
- (27) Dorn V. Das Asiatische Museum der Kaiserlichen Akademie der Wissenschaften zu St. Petersburg. Spb., 1846. S. 26.
- (28) АВ ИВР РАН. Фонд 152, опись 1. Ед. хр. 5. Азиатский музей. Выписки из протоколов общего собрания Академии Наук и переписка с академическими учреждениями и частными лицами о комплектовании Азиатского музея. Начало: 1 октября 1861 г. Окончено: 21 января 1865 г. Л. 81 об.
- (29) Каталог Китайским и Японским книгам, сделанный Государственной Коллегии иностранных дел Переводчиками, Коллежскими Ассессорами: Павлом Каменским и Степаном Липовцовым. [СПб., 1818]. С. 55.
- (30) АВ ИВР РАН. Фонд 24, ед. хр. 14. Дневниковые записи. Лл. 107 об. - 108.
- (31) Петрова О.П. Введение//Петрова О.П., Горегляд В.Н. Описание японских рукописей, ксилографов и старопечатных книг. Выпуск 1. М.: Изд-во восточной литературы, 1963. С.17. О. Петрова дает ссылку на «Краткая памятка», с. 69 – 73 (полная ссылка: Азиатский музей Российской Академии Наук 1818 – 1918. Краткая Памятка. Петербург: Российская Государственная Академическая Типография. Вас. Остр., 9 линия, № 12, 1920. С.69 – 73 – В.К.).
- (32) Петрова О.П., Горегляд В.Н. Описание японских рукописей и ксилографов и старопечатных книг. Выпуск V. М.: Изд-во «Наука». Главная редакция восточной литературы, 1969. С. 15.
- (33) Азиатский музей Российской Академии Наук 1818 – 1918. Краткая Памятка. Петербург: Российская Государственная Академическая Типография. Вас. Остр., 9 линия, №12, 1920. С. 1 – II.
- (34) Попова И.Ф. Указ. соч. С. 25.
- (35) Попова И.Ф. Указ. соч. С. 29.
- (36) Dorn. Das Asiatische Museum. S. 112.
- (37) Елисеев С. Г. Японский фонд// Азиатский музей Российской Академии Наук 1818 – 1918. Краткая Памятка. Петербург: Российская Государственная Академическая Типография. Вас. Остр., 9 линия. №12, 1920. С. 69–70.
- (38) Горегляд В.Н. Японоведение//Азиатский музей - Ленинградское отделение института востоковедения АН СССР. М.: Изд-во «Наука». Главная редакция восточной литературы, 1972. С. 187.
- (39) Чулуевский Л.И. Архив востоковедов (б. Азиатский архив)) //Письменные памятники и проблемы истории культуры народов Востока XXIII годинная научная сессия ИО ИВ АН СССР. Материалы по истории отечественного востоковедения. Часть III. М.: Наука. Главная редакция восточной литературы, 1990. С. 11.

(40) Синицын А.Ю. Предметы из материалов экспедиции Н.А. Хвостова и Г.И. Давыдова в собрании МАЭ РАН//Нитиро канкэй сирё-о мэгурү ко-русуй кэнкю: сю:кай 2010 (日露関係史料をめぐる国際研究集会 = Международная конференция, посвященная историческим материалам по русско-японским отношениям). Токио: Нихон гакуссин - То:кё: дайгаку сирё: хэнсандзё (日本学士院・東京大学史料編纂所 = Японская Академия наук - Историкографический институт Токийского университета), 2010. С. 1 - 10 (на русском языке); С. 11 - 22 (на японском языке).

(41) Ураジミール・ダリー【著名な辞書編纂者】は、この「Кантар」に次のような解釈をしている。「大卒稱。固定支点を持ちその支点により吊るされる。固定していない分銅が付いている。稱、あるいは、不等分のつづの付いた天秤。Даль Владимир. Толковый словарь живого великорусского языка в 4 тт. Т. 2. И - О. М.: ТЕРРА, 1994. С. 85.

(42) ПФА РАН, фонд 1, опись 2 - 1814, № 37, §117, л. 1 - 3.

(43) Васильева О.В. «В пользу Императорской Публичной Библиотеки...»: приращение фондов восточными манускриптами в 1812 - 1814 гг.//Страны и народы Востока/Выпуск XXXV: коллегия, тексты и их «биографизм»/ Под ред. И.Ф. Поповой, Т.Д. Скрынниковой. М.: Наука. Изд-во Восточная литература, 2014. С. 61 - 81.

(44) РГАВМФ. Фонд 166, опись 1, дело 4671. Л. 200.

(45) Киряченко А.А. Пиратские корабли «Юнона» и «Авось»// Информационно-аналитический бюллетень № 8. Специальный выпуск. Апрель 2001 г. 16 с.

(46) Попова И.Ф. Указ. соч. С. 35.

(翻訳: 有泉和子)
【 】内は訳注

本研究集会の開催には、維新史料研究国際ハブ拠点形成プロジェクト(研究代表者: 小野将) / JSPS 人文学・社会科学データインフラストラクチャー構築推進事業(〇〇三一九二一七五九二、業務主任者: 保谷徹) / JSPS 科学研究費補助金基盤研究 A「在外日本関係史料の調査と貴重史料の研究資源化による維新史料研究国際ハブ拠点の形成」(課題番号二〇H〇〇〇二三、研究代表者: 保谷徹) / 共同利用・共同研究拠点「日本史料の研究資源化」の特定共同研究「ロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所蔵サハリンアイヌ交易帳簿の研究」(研究代表者: 保谷徹) などの経費を使用した。